

市民スタディツアー水俣 アンケート結果

1. 参加者 7名(男性:3名、女性:4名) 平成25年11月29日実施

2. 今回のツアーは趣旨・目的に合致したものと思われませんか？

良い	普通	悪い	合計
7	0	0	7

3. 環不知火プランニングの講話・レクチャーは参考になりましたか？

良い	普通	悪い	合計
7	0	0	7

4. 愛林館の講話・レクチャーは参考になりましたか？

良い	普通	悪い	合計
7	0	0	7

5. 今回のツアーそのものや、ツアー中の諸行事で今後の市民活動に生かせられると思われる点はどんな点ですか？(一部抜粋)

(1) ゴミ問題(分別等)

- ◆ 中学生に分別収集の手助けをさせること。子供たちはもちろん親も積極的になると思う。
- ◆ ごみ分別の徹底のために26の自治体役員に「リサイクル推進員」を置き、会員2名のお手伝いを各回持ち回りにすることで、全員が分別方法を確実に学べるという方法は大変有効だと感じた。
- ◆ ゴミ3Rの具体的実践(仕組みづくり)、ごみも大切な資源
- ◆ 道の駅みなまたで行われていた「食品ロス削減のためのアンケート」は問題意識や注意を喚起するような設問の仕方が参考になった。

(2) 水俣の教訓をどう生かすか

- ◆ 水俣では公害の歴史の大きさが、コミュニティ全体をまとめ上げ、コミュニティ内部で今なお進行中の問題として取組みが続き、発信の基調をなしている。一方で、コミュニティの外側からの「受難の地」の認識(評価)を活かして、コミュニティ内の分裂修復のツール「もやい」として意識的に機能させている集団の存在を強く認識しました。
- ◆ 環境問題、その他でいろいろな問題や取り組みについて学習の機会がありますが、やはり現場に行っている力はとても大きいと思いました。少しでも実感することを他の人と共有できるような場を作るのがいいなと思いました。
- ◆ 環境モデル都市認定・環境首都水俣市のこれまでの取組や現況を理解できた。[水俣の教訓]を基に、環境都市の実現に真正面から取り組み続ける事実を認識できた。
- ◆ 環境モデル都市に近づけるように努力する(ゼロ・ウェイストのまちづくり)。
市政⇒市民に学習を(意識改革・高揚)。発信時は5W2Hを考えて。

- ◆ 「水俣の取組みを宇部でどう生かせるのか？」という投げかけは、この「投げかけ」を市民レベルで共有することこそが重要ではないかと感じました。そのためには、まずは水俣との交流をより広く進めていくことが必要に思います。
- ◆ 水俣では公害克服の過程を伝えることをハブとし、個々の地域コミュニティにおける地域活性化の取組みをスポークとして紹介していました。エコ・ツーリズムとして外部からの経済的な呼び込みを、地域の中心(工業地区)から末端(中山間地区)に伝えており、小野地区などへのモデルとなり得ると感じました。

(3) 森林・バイオマスについて

- ◆ 「巻枯らし」は林業の省力化の観点からだけでなく、バイオマス利用においても軽量化により搬出を容易にし、ストックヤードを肥大化させず、低水分の良質なチップを供給可能とする手法であると感じました。
- ◆ 昨年のサミットで話題となった竹林バイオマスのエタノール化事業はJNC株式会社(旧チッソ)によって技術的には完成されているとのこと。市場のエタノール需要、競合など本格導入には壁が多いようでした。それでもなお石油資源枯渇、地域によるエネルギー自給と森林管理を考えると目を離せません。(懇親会での水俣市の課長情報)
- ◆ 自然を考える(自然破壊をやめて未来の人たちが喜び、賞賛するような行動が出来れば)

(4) その他

- ◆ 愛林館の設置の経緯と一連の取組はスゴイと思いました。
- ◆ 高いところからでなく同じ目線のところから、また包み隠さず伝えていくこと

6. 市民活動を活発化させるために今後どのような企画・活動を望まれますか？(一部抜粋)

(1) イベントなどを開催する

- ◆ 今回の水俣の二人の講師の方をお呼びし、宇部市で実践活動をしている市民との活動交流集会をもちたい。
- ◆ 宇部市民同士がお互いをもっと知り合い、活動の意義や価値を再確認することが大切なので、活動見本市的なものも同時開催で。(文化・芸術的な活動発表会は盛んだが、まちづくり市民活動の横断的つながりが薄いのでは)
- ◆ 市民にアピールすることも大事ですが、いつでも誰でも気軽に参加でき、そして確実に実績も残していけるようなものがあると良い。
- ◆ 市外・市内の若い人に市内の興味ある景色の写真を撮ってもらいコンテストをする。コンテスト結果をPR材料とする。

(2) スタディツアーの継続

- ◆ 里山へIターン、Uターンした若い人達が里山を活性化しているところが他県でよく聞きます。そう言う所へ視察に行けたらと思います。
- ◆ スタディツアーの継続が望ましいが予算の関係上難しければ市民レベルでの活動交流に発展させる。

(3)その他

- ◆ ハブ機能の強化: 宇部では、むしろ「公害は乗り越えられた過去の出来事」との認識が浸透しています。しかし、これは主要産業のRC活動等によって、かえって醸成されてしまう、工業の町に共通にのしかかる、実態とは裏腹な表現なのではないでしょうか。水俣同様、今なお口にすることが憚られているように思います。そんな中で、いま、「くさい宇部」を感情的な彩りを交えず市民がやっと語りはじめたようにも感じています。先ず当面は「くさい宇部」がふつうに語られる状況を見守り、「『臭い宇部』というアイデンティティーに満足しよう」ではなく、「くさい」問題を見つけて解決しながら活用する。それを喜びとする。「『くさい』を肥しに育つ宇部」にアイデンティティーを変えていきたいと思います。そうした手法であれば対外的に惹きつける魅力が創造できるかもしれません。(宇部式「もやい」)
- ◆ そう考えると、市街地では、民間・市民レベルでの一層の緑化を極端といえるほどまで進めることが、宇部のアイデンティティーを増強する上で大きく意味を持つと思います。遊休地、造成地の裸地はNG、駐車のためだけのスペースもNGではないでしょうか。市街地に少ない齢を経た巨木は切り倒さず、炭酸ガス吸収効率の観点からだけでなく、その樹木と過ごした人やコミュニティのシンボルでもあり、様々な生物が寄り添って生きているのですから、自然に病むのであれば自然に病ませ、腐朽し土に還るまでを見届ける。自然の与えてくれる学習の機会として活用したいとも思います。また、そうした地域のシンボルツリー更新の場を公園や公共の土地が担っていくことを期待します。
- ◆ スポーク機能の強化: 九州では「一村一品」運動が先行しているので「あるもの探し」が当たり前のようになり徹底して行われていました。宇部の各地域にもまだまだ未発掘の自然、伝統「あるもの」があります。愛林館で沢畑亨氏が起用されたように、地域起しの核となる施設に、地域外からでも、地域起こしの熱意(使命感)ある人物を運営の中心に据えることは大きな効果を生むと感じました。
- ◆ 一方で「ふるさとマップ」、「ビオトープ二俣瀬」などのすでに取り組まれた資源は、新たな「あるものさがし」のモチベーションを下げぬよう(先行するこれらの模倣・依存とならぬよう)、一線を画して充実、更新をはかり、全地域の「あるものさがし」が出きった時点で本格的に統合する取組が必要に思われます。
- ◆ 市民活動の活発化⇒目標が出来れば各レベルで動くようにすべき。力があり、情報が広く発信できる組織や人も利用する。

7. ツアー全体について評価すべき点、反省すべき点があれば教えてください。(一部抜粋)

(1)内容について

- ◆ 盛りだくさんの充実したプログラムで大変勉強になった。このように機会をいただいたことに感謝したい。
- ◆ 天候のために行けなくなった場所もありましたが、急きょ水俣市役所を訪問することができ、充実したツアーだったと思います
- ◆ 人としてのあるべき考え方を教わった。(水俣病→公害→環境モデル都市へ。不幸な出来事を克服する参考事例となる。)過去と向き合い、現在を生き、未来に立ち向かう姿勢は生き方そのもの)
- ◆ 水俣病患者さんが初めに確認された集落、実際の廃液が流された場所など、参加者の関心に応じて臨機応変に連れて行って下さってありがたかった。(本来案内しづらい場所もあったのではと思います)。資料館は時間不足でしたが仕方ありませんね。
- ◆ 愛林館の見学ははととも興味深かった。過去の公害で今も続く痛みを持つことと、そこからつながって

いる今取り組まれている活動が両方見ることができてよかった。

- ◆ ツアーとして大変良いとおもえました。
但し、バリエーションやバージョンアップが必要ないという事ではありません。
- ◆ 予定していた棚田が見られなかったのは残念でした。
- ◆ 久木野で狭い道を通行したことは安全上よくなかったことを反省すべき。(安全第一、事故は起こしてはならない:特に子供を含むツアーの場合)
- ◆ 段取りが良い。(水俣市、環不知火プランニング、愛林館等への連絡・対応等)

(2) 時期について

- ◆ 水俣条約会議、豊かな海づくり大会直後で、見どころもありよかった。

(3) 人数について

- ◆ 多すぎず、少なすぎずだからこそ水俣市の方々も暖かく迎えてくださったのだと思います。
- ◆ 少なかった。20 人くらいのツアーでもよかったのではないか。いい企画であったのもったいない
- ◆ もっとたくさんの方に体験していただきたいツアーだが予算には限りがあるので、例えば水俣の市民の方々と市民レベルで交流し、宇部市民の活動の活発化につなげるような催しが必要だと考える。

(4) ガイドについて

- ◆ 環不知火プランニングの方々も愛林館の館長さんも、水俣の行政の方々も皆、魅力的で御自分の言葉で語られたのでとても響いてきました。どんな方のお話を聞くというのは大きなポイントだと思いました。
- ◆ 参加者の関心に応じてガイドさんが対応してくださってよかった。

(5) 募集について

- ◆ 帰ってきてから宇部志立市民大学環境学部の OB さんたちとお会いする機会があったのですが、ツアーのことを「知らなかった。行きたかった」という方が何人もいました。「また是非行きたい」とも。

8. その他

(1) 「スタディツアー」のネーミングについて。

- ◆ 「スタディ」は嫌な響きが少しある。

(2) 今後について

- ◆ 水俣市長にお会いしたり、宇部市職員のお出迎えがあったりで、参加させていただいて良かったんだろうかと恐縮しています。
- ◆ 水俣病と水銀しか知らなかったのですが、偏見に対する苦しみは障害者や原爆病の方々などと同様にあるということを初めて知り、心が痛みました。
- ◆ 水銀が及ぼした人体への影響、水俣湾の埋立地のお粗末さ…。国の発展の為とはいえ人が人を苦しめることは真の文明国家とは言えないと思う。負の遺産を残す、水銀や原発はやめて欲しい。
- ◆ 昨年の「中国・九州地区環境先進自治体首長サミット(第1回)in 宇部」に始まるこの取組は「ツアー」で

終わらず、上記の「宇部での取組みにどうつなげるか」に展開して行かなければなりません。「水俣ファンの会(仮)」などを創設し、参加者同士、水俣の情報に関心を持つ市民で経験を共有し深め、ツアー参加していない市民へ意識の浸透をはかることが必要と考えます。その上でも今後の水俣との交流プランを示すことができなければいけないでしょう。

- ◆ とても刺激され、また楽しい(おいしい)2日間でした。スタッフの方々大変お世話になりました。
- ◆ 宇部独自の環境 ISO は無理か？
- ◆ 水俣市民のゴミの分別やら久木野村の体に優しい毎日の食生活のあり方など、普段当たり前にやっている事の大きな価値に当事者たちが気づき元気につながるためには＜外の人間・第三者＞から評価されることが大きいと二人の講師が指摘していた。宇部市の市民にも当てはまることであり、次へつながる市民の活力を生み出すものだと感じた。(常磐公園、彫刻ビエンナーレ、公害への取り組み、農業の実践など…)
- ◆ 宇部市民同士で互いの市民活動実践の価値を見出しあうような取組みが必要と思う。市民活動の三つのキーワードは「使命感、達成感、利益(人間関係づくり)・・・沢畑氏談
- ◆ 市民の参加を増やし、活動を広めるためにはどのように発信したらよいかが重要だと思います。受け手が動くような発信方法・動機付け。自分や子供達、将来への影響度を認識。

9. まとめ及び同行者所感

- (1) 参加者全員が熱心に見学し、熱心に質問し、メモを取るなどして熱心に学習されました。
あわせて、初めて見聞きすることや太刀魚丼や地産地消の田舎料理など料理なども含め楽しむことのできた充実したツアーとなりました。
- (2) 配布したアンケートでは傾聴すべき有意義なご意見、コメントを多数頂きました。
- (3) 親水護岸や水俣病資料館を案内して頂いたフィールドパートナーの大澤さん、講義をして頂いた環不知火プランニングの森山代表そして久木野地区愛林館の沢畑さん、皆さん当方の要望に合わせて丁寧に説明して頂きました。
- (4) 水俣市役所の環境モデル都市推進室から2名の職員がツアー期間中終始同行し、初日の講義では飛入りで水俣市のごみ分別収集のお話をして頂き大変お世話になりました。また2日目は予定になかった「水銀条約の写真展」の案内と当日朝の市長への接見の機会を設定して下さるなどそのご尽力に感謝します。参加者の皆様方に水俣市役所の対応はとっても水俣市長との接見を含めて、強く印象に残ったものとなりました。
- (5) 初日の夜の懇親会には水俣市から関係部署の課長さん以下4名、及び環不知火プランニングからも当日案内してくれた2名の方々にも参加して頂き、身近にお互いが一市民という立場で話が出来る大変充実した交流会となりました。
- (6) “志立市民大学OBの友人で、知っていれば行きたかったと言う人が数人いた。”という回答がありましたが、募集の徹底・拡げ方についてはまだまだ工夫が必要と感じました。
- (7) 「これまであまりにも水俣を知らなさすぎた。素晴らしい取り組みをしているので是非周りの人にも伝えたい」という複数のご意見を伺いました。
- (8) これを聞いて、水俣市が、『知って貰うには来て貰うことが一番。そこから周りに拡がっていく』という方針で、教育観光に積極的に取り組んでいるのがうなずけました
このスタディツアーも継続することに大きな意義があると思います。

- (9) アンケートにもありましたが、2 日目の久木野地区でのバスの運行について、現地案内者の「以前中型バスで通行できた」との言葉に従って途中までかなり狭い道を無理に通行したことについては、主催者として安全上反省すべきだと思います。(ただしバスの運転士さんには、自分で判断して行けないと思ったら、止めるようにとの指示が交通局の方から出ていたそうです。)
- (10) スタディツアーの「スタディ」という言葉が参加をためらうという声がありました。募集をやりやすく(応募を増やす)するためにはない方が良くも知れません。
- (11) 上記(9)項にも絡みますが、なかなか参加者が集まらないケースでもツアーに参加すれば、「面白かった」、「参考になった」、「楽しかった」、「是非続けて欲しい」という評価が多い。どうすれば参加前にこのツアーの良さ、素晴らしさを広報・宣伝できるのか、今後の検討課題となりました。